

人権通信

2025年度 第3号

城ノ内中等教育学校人権委員会・レベラース部

こんにちは、人権委員会・レベラース部です。

2月後半から暖かい日が続き、ずいぶん春らしくなってきました。

さて、今回の担当は43・44・53ホームルームの人権委員の皆さんに、先日行われた人権映画会の感想を書いていたいただきました。

映画『ぼくが生きてる、ふたつの世界』

◆あらすじ◆

宮城県の小さな港町で生まれた五十嵐大(吉沢亮)。両親の陽介と明子が聴覚障がい者であることから、大は二人の「通訳」をすることが当たり前と考えていたが、成長するに従って周囲から向けられる視線にとまどいという立ちを覚える。気丈な母親に対してもうとまじさを感じ、冷たい態度を取るようになった大は、20歳になると逃げるように東京へ出ていく。数年後、帰郷した大は、母への気持ちの変化に気づく。

◆メッセージ◆

本作品は、聴覚障がいのある親をもつコーダの青年が、家族との距離や自分の役割に揺れながら、再び向き合おうとする姿を描いています。通訳を担い続けてきた過去と、離れて初めて見えてくる家族への思い。その変化は、誰にとっても身近な「大切な人との関係」を考えさせられます。

「自分ならどう感じるだろう」「身近な人の思いにどんなふうに寄り添えるだろう」。そんな問いが、そっと心に浮かぶ作品です。

※「コーダ(CODA)」とは「Children of Deaf Adults」の頭文字を取った言葉で、耳が聞こえない、あるいは 聞こえにくい親のもとで育った、聞こえる子どもを意味する。

・僕は、映画を見ている気になりませんでした。息がつまるような怒濤の展開も、衝撃的なシーンもありません。その割に、話は突然進み出します。日常を切り抜いてみているような不思議な感覚でした。ただその中で、コーダの主人公が、周りの人たちに理不尽なことを言われて傷ついたり、親の通訳を求められる中で、自分だけが配慮をしなければならず面倒だと感じているように思いました。主人公が東京に出たのは、一種の介護疲れのようなところから、新しい生活を求めたのではないかと思います。

・私が一番心に残っているのは、町の人に「あなたのお母さんは耳が聞こえないから」と言われるシーンです。近所の家の花壇が壊

された時に主人公に声をかけてきた人や、訪問販売の人からのそういった言葉には、「あなたのお母さんは普通とは違う」というニュアンスが含まれていたように思います。そういった言葉を聞かされる中で、それまで普通だと思っていた主人公は、自分と周りとの違いを感じるようになり、母親も息子がつらい思いをするのは息子の責任ではなく、自分のせいだと感じていたように思います。2人が傷ついていくのを見るのがとてもつらかったです。

・私が一番心に残っているのは、主人公が東京に出て行った後、耳の聞こえない人たちと手話で交流するシーンだ。はじめて自分の境遇を理解してくれる人と出会えた主人公を見てうれしく思った。

耳の聞こえない親を持つ子どもが、幼少期から「通訳」という重責を担わされる現実に、胸が締めつけられた。言葉を伝えようとするエネルギーと、それでも伝わりきらないもどかしさ。特に感情が昂った時の手話の鋭さや孤独な表情は、主人公の痛みがダイレクトに伝わってきた。これは家族の助け合いという美談ではなく、社会のバリアフリーの不足が子どもの権利を侵す縮図だと感じる。

マジョリティの「聞こえるのが普通」という無自覚の差別が、ひとりの若者を孤立させていく過程が苦しい。違いを認め、誰もが自分の言葉で生きられる社会、歩み寄ることで作られる一つの大きな世界を作る必要性があり、そのためには問題を自分事としてとらえる必要性があるということ突きつけられた作品だった。

私はこの映画を鑑賞し、耳の聞こえない両親と、聞こえる子どもが紡ぐ愛の深さに心を打たれると同時に、現代社会の抱える大きな課題を突きつけられたような気がしました。

社会で生きる中での苦悩が描かれていましたが、障がいのある方の子育てにおいて、最も高い壁となるのは身体の不自由さではなく、周囲の偏見や理解のなさではないかと感じました。その上で、もし私が周囲の人の立場だったとしても、本当に正しく接することができるのか不安に感じました。

現在、障がいのある方の子育てには厳しい目が向けられることが多いように感じますが、正しい理解を広め、偏見をなくし、全ての人の人権が尊重されるような社会を創っていきたいと思います。

43・44・53ホームルームの人権委員の皆さんの意見はどうでしたか?この機会に、ご家族とこの作品を鑑賞して、お互いに感想を話してみるのもいいかもしれませんね。

この人権通信が、人権について考えるきっかけになればと思います。

